

I 研究の視点と経過

1. 研究の視点

(1) 障害児教育をめぐる動向

昭和54年（1979年）に養護学校義務制が施行されて今年度で17年目を迎える。その間ハード面では学校の新設が行われた。文部統計要覧（昭和62年度）によると全国の養護学校数は昭和50年では393校であるが昭和55年には677校に増加している。ソフト面では教育課程の作成や改訂などが全国的に行われてきた。また昭和56年（1981年）には「国際障害者年」の制定、昭和58年（1983年）からは「国連・障害者の10年」が始まった。それらのテーマは「完全参加と平等」でありそのテーマの下にある考え方はノーマライゼーションの理念の実現ということである。これらの社会的な情勢と共に教育・福祉の理念が変わってきたといえる。

厚生省の渡邊（1995）は福祉の理念の変化の中で自立の考え方の変化について述べている。そこでは「たとえ働くことができなくても、そして周囲の多くの人に助けられながら生活していくのであっても、自己決定・自己選択が保障されて生活していくのであるならば「自立生活」だと考えるようになってきた」と論じている。

さらに最近ではノーマライゼーションに加えてQ.O.L.（Quality Of Life 生活の質）ということが言われはじめている。

ここ数年来、学校教育においても自立の考え方の変化やQ.O.L.の概念に対応して教育内容や指導法の再検討をする動きがでてきている。

(2) 本校の研究テーマの流れ

本校の教育研究活動は、学習指導要領の改訂や養護学校の義務制実施などを節目としながら、その時々の教育現場の動向と学校独自の考え方や方針でテーマを設けて取り組んできた。そして、この研究活動の一環としての教育課程の編成も昭和39年度（1964年）に養護学校として独立した以降では41年度（1966年）50年度（1975年）62年度（1987年）と3回行っている。

特に62年度（1987年）の教育課程の改訂において、教育目標を従来の「社会適応をめざし、職業的自立ができる子」から「自己実現をめざす、つまりその子らしさを発揮して生きる子に」へと変更した。ここに前述の「自立」の考え方に沿った動きが見られる。

また昭和54年度（1979年）から60年度（1985年）までの7年間は養護学校の義務制実施に伴い児童生徒の障害が重度化・多様化してきたことに対する教育的対応の一つとして、集団学習を研究テーマとして取り上げた。

昭和63年度（1988年）から平成4年度（1992年）までの5年間は「発達と障害に応じた指導」というメインテーマのもとにプロジェクト方式ともいえる研究の体制をとってきた。これは、教師が日々の教育実践の中で抱えている問題意識や課題をもとにいくつかの下位テーマを設け、全教師がどれかのテーマに基づいてグループを作り、研究を進めようというものである。

平成5年度（1993年）は創立30周年記念行事のため教育研究会は開催できなかったが平成6年度（1994年）からは「豊かな心と生活をめざして」というテーマの下に各学部による教育実践が続けられている。

（3）テーマ設定の理由

テーマ設定にあたり 各学部研究会や全体研究会において児童生徒の学校生活の様子や子どもたちに願う姿などを話し合った。学校生活の様子からは「友達と関わり合いがもてない子」「こだわりが取れず イライラしている子」「休み時間に一人でハンカチをヒラヒラさせて時間を過ごす子」等についての意見があった。また望むべき姿では「いろいろな体験を通して自ら考え 行動できる人になってほしい」「現在の学校生活を豊かにしたい」「その子らしさ 生きる喜びを大切にしたい」等の意見が出された。これらの児童生徒の実情や願う姿 そして障害児教育をめぐる社会的動向や子どもの内面の更なる充実といった教育的ニーズなどを考慮して「豊かな心と生活をめざして」というテーマが設定された。

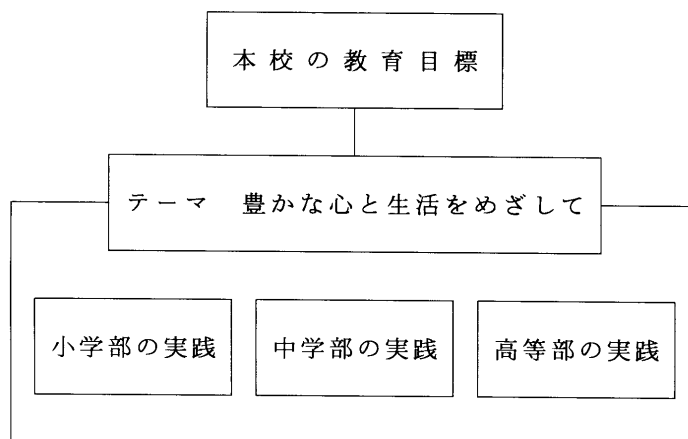
2. 研究の目的

研究の目的は「豊かな心と生活をめざすための教育内容や指導方法を検討すること」である。これを受けて各学部ごとに研究目的を設定した。4ページの表I-1に各部の研究の枠組みを掲載した。

3. 今年度の研究の経過

（1）研究の位置づけ

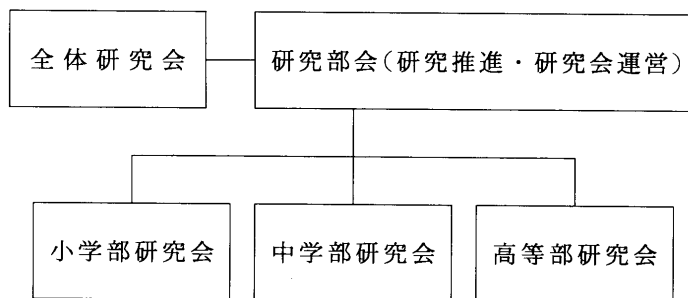
今年度の研究の位置づけは図I-1のようである。本校の教育目標を受けてテーマを設定した。そのテーマを受けて各学部での実践が行われている。



図I-1 研究の位置づけ

（2）研究体制の構造

今年度の研究体制の構造は図I-2のようである。毎週火曜日を研究会活動の日とした。各学部でテーマを念頭に置いた話し合いと実践が続けられていった。その取り組みと並行して研究部会が定期的に行われ各学部からの意見の集約やテーマの捉え方の協議 また教育研究会運営の諸準備などの話し合いを持った。



図I-2 研究体制の構造

各学期の始まりと終わりに全体研究会を行った。そこでは各学部

の研究の中間報告をして 全教師に他学部の様子がわかるようにした。

(3) 各学部の取り組み

ここでは 各学部の実践について簡単に記す。

小学部では昨年に引き続き「部朝の会」での集団学習を通して 子どもたちの心や生活の豊かさを育む取り組みを進めていくことにした。今年度は 学習集団を4つの縦割りグループに分け リーダーが中心となって互いに協力したり他グループと競争したりして所属意識や仲間意識を高めるとともに 相手を思いやり認め合ったりする子ども同士のかかわり合いを育てていくことを重点とした。学習内容については 例えばお神輿を作って4人で担ぐなどみんなで協力し合わなければできないような活動を取り入れていくことにした。また 子どもたちが興味をもって意欲的に取り組めるよう その学習形態や学習の方法・手だてなども工夫を凝らし その都度検討しながら実践を行っていった。

中学部では「散歩」を取り上げ そのなかで 子ども同士のかかわり合いを大切にして自然や社会へのつながりを深めていきたいと考えた。同時に 散歩の良さを再認識し 学級を中心とした取り組みの様子や気づいたことを話し合い深めていくこととし その教育的意味を明らかにしようとした。

また今後の散歩を考える手だてとなるように 今まで実践してきた散歩コースや目的などについて整理し 子どもの興味・関心や発達段階に合わせて対応できる活動内容表を作成した。これによって 教育の場における散歩のあり方を少しでも明らかにしたいとも考えた。

高等部ではMT(Multi purpose Time)の内容として生徒一人一人が課題に取り組む「挑戦学習」に加え 今年度から実体験型ともいえる「ほんもの学習」をクラスのMTとして取り入れた。「ほんもの学習」は余暇の過ごし方につながる学習形態の在り方の一つの試みである。いろいろな場・人・ものとのかかわりの中で 今自分ができる範囲で実行してみるという経験こそが大切と考えた。実際の活動では「調理」「ボウリング」「史跡めぐり」などを行った。また 今まで学部全員で行っていた「ウォークベースボール」や「カルタ取り(百人一首)」などの活動も余暇生活につながるものと考え 「レクリエーション学習」としてMTに加えることにした。

紀要4ページに各部の研究の取り組みを一覧表にした。

4. テーマの捉えかた

(1) 「豊かさ」観

広辞苑によると「豊かさ」とは ①満ち足りたさま 不足のないさま 十分で余りあるさま ②ゆるやかなさま のびのびとしたさま とある。この意味を使うと「豊かな心と生活」は「満ち足りた心と生活」「のびのびとした心と生活」となる。①②共に精神的な面と物質的な面の両方に適用できる概念である。

国勢レベルでみると経済企画庁が毎年5月に生活の豊かさを総合的にとらえる目安になる「豊かさ指標(PLI新国民生活指標)」を公表している。その中では 豊かさ指標として「住む(住環境など)」「いやす(医療、福祉など)」 (以下 5ページへ続く)

表 I - 1 各部の研究の取り組み

	小学部	中学部	高等部
学部 協議内容	子ども同士の豊かなかかわり合いをめざした部朝の会	散歩を通して育つ子どもの姿	卒業後の生活にいきづくことをめざした学習活動
目的	子ども同士のかかわり合いを育てる指導の在り方を検討する	子ども同士のかかわり合いを大切にして自然や社会へのつながりを深めていく	余暇の過ごし方につながる学習形態の在り方を検討する
研究仮説	縦割りグループの中で互いに協力する場面を設定することにより学年を越えたかかわり合いができる 子どもたちのかかわり合いと活動が豊かになっていくことが豊かな心と生活につながる	散歩を通して仲間を意識し思いやりをもってかかわると共に 集団の中の一員としての自分自身を自覚して 自らの行動を決定していく あわせて自然や社会との様々な出会いのなかで 好奇心・探求心をもって主体的・積極的に行動し 自ら経験し発見する喜びを味わうことが豊かな心と生活につながる	社会に出るまでにできるだけ多様な経験を積むことで 余暇の過ごし方を見つけ、広げ、深めるそれが豊かな生活につながる その経験の中における人・もの・社会などのかかわりを通して自らを見つめ、他者を認めることにより豊かな心が育つ
研究内容	部朝の会でかかわり合いを広げるための実践を行う	・年間を通して散歩を行う ・散歩のカリキュラム化	MT（挑戦学習 ほんもの学習 レクリエーション学習）の時間を通して余暇生活につながる実践を行う
研究方法	・子ども同士のかかわり合いを実践的、事例的試みの中で観察記述する ・子どもの様子を話し合いながら指導の内容や方法を考えていく作業を繰り返す	・学級単位の散歩を積み重ねその中で気づいたことを話し合う ・散歩のカリキュラム化を通して 子どもの発達段階に応じた指導を探る	・卒業生や、在校生の家庭にアンケートを行い余暇の過ごし方の実態を探る ・MTの実践の中での生徒の様子を観察し どのような活動が豊かさにつながるかを検討する

「学ぶ（進学率など）」「費やす（貯蓄、消費など）」「遊ぶ（娯楽など）」「育てる（育児環境など）」「働く（雇用状況など）」「交わる（地域交流など）」の8項目を挙げている。これらの項目は趣味娯楽といった精神面と経済、福祉、社会といった物理面の二面を含んでいる。学校教育において幾つかの研究をみる。

国際障害者年日本推進協議会広報委員長の大野（1990）は「卒業後の豊かな生活の条件」として以下の6項目を挙げている。

- ①リズムの保障……働く場所、行く場所があること
- ②受入れ、認めてもらう場があること……職場や家庭などで存在が認められること
- ③豊かな人間関係……話し相手や相談相手があること
- ④自分を活かす趣味活動……余暇を豊かにできる場
- ⑤自立への支援……与えられる生活から自らの足で歩む自立への道
- ⑥経済的な安定

また埼玉大学附属養護学校（1994）は「将来の充実した社会生活」として以下の6項目を挙げている。

- ①健康で過ごすことのできる生活
- ②人とかかわり社会との接点を持てる生活
- ③自分でできることは自分ですというより自立的な生活
- ④家族や社会から認められる生活
- ⑤成就感や達成感が得られる生活
- ⑥楽しみを持てる生活

群馬大学附属養護学校（1994）は「豊かな生活とは、生活経験や興味・関心、人とのかかわり等の広がりや深まりに応じて、子供たちの願いや思いが満たされる生活である」としている。

このようにみえてくると物理的なものは外的条件であり客観性がある。一方 精神的なものは本人がどう思うかという主観的な要素が多い。

（2）テーマの捉え方

本校では昨年度の研究では「豊かな心と生活とは 人とのかかわりあいの中で人間らしく生きること」と捉えた。

今年度は 各部の研究会において それぞれの部における「豊かな心と生活」像について更に話し合いを深めた。その結果以下のような項目がでてきた。

〔小学部〕

- ・進んで学習活動に参加する子
- ・みんなと心を開いて共感できる子
- ・自ら工夫して考える子

〔中学部〕

- ・様々な出会いのなかで、好奇心・探究心を持って主体的・積極的に行動し、自ら経験し 発見する喜びを味わう。
- ・仲間を意識し、思いやりを持ってかかると共に、集団の中の一員としての自分自

身を自覚して、自らの行動を決定していく。

〔高等部〕

- ・自ら選び意欲的に取り組む生徒
- ・目的をもって自ら行動できる生徒
- ・自分の役割を果たし 社会参加できる生徒
- ・まわりの物や人を思いやれる心
- ・自分や他者を認められる心
- ・成就感を味わい自己実現できる生活

以上の項目と本校の教育目標を反映させて「豊かな心と生活」を以下のように捉えることにした。

豊かさを『人や自然や社会とのかかわり合いの中で その子らしくのびのびと生きること』と捉える。

各学部が『かかわり合い』という視点から研究に取り組んでいることについて簡単に述べる。

小学部においては友達とのかかわり合いを研究の柱にしている。小学部朝の会において縦割りグループをつくり学級や学年を越えたかかわり合いを育てる試みを行っている。中学部では散歩を学習と捉え地域を学習の場とした。ここでは子どもどうしのかかわり合いや子どもと地域や自然とのかかわり合いが柱になっている。高等部では 余暇の過ごしかたにつながる種々の活動を模索している。生徒にいろいろな経験や体験をさせることに重点を置いている。そこでも人や物とのかかわり合いが柱となっている。物や地域などをまとめて『社会』と捉えることにした。

本校の教育目標に『その子らしく』ということが掲げられている。豊かな心と生活を考える時に その子らしさ のびのびと生きることが不可欠の要素として挙げられる。そこで今年度のテーマの捉えかたを上記のようにした。

(3) テーマの底にある各学部の指導の一貫性と独自性

テーマを踏まえて各学部が「かかわり合い」という視点から実践するという意味で一貫性がある と捉える。ここではさらに 自立の考え方の視点と『新しい学力観』から各学部の指導の一貫性と独自性について検討する。

自立の考え方は冒頭に述べたようにその概念の枠が広がってきている。自己選択・自己決定 即ち自ら選び 自ら決めるというこの姿勢は 本人の意思や意見の尊重という福祉の理念にも重なる。

また 「子どもたちの内発的な学習意欲を喚起し 自ら学ぶ意欲や思考力, 判断力, 表現力などを学力の基本とする」という『新しい学力観』は障害児教育で言われている「一人一人の発達や障害に応じた指導」に通じるところがある。

この自己選択・自己決定や意欲という視点から今年度の実践を見つめてみる。

小学部では部朝の会で「歌・リズム」「つくる活動」「ゲーム的活動」を行っている。ここでは教師の模範提示により子どもの興味や関心を引きつけ 学習意欲の喚起を促す配慮をした。それぞれの活動の中で子どもが 好きな楽器 材料などを選べるようにその選択

肢を多くするように留意した。

中学部では散歩を学習活動に取り入れている。そこでは生徒が行き先を決めたり遅れた子を待つというような自己選択・自己決定そして子どもどうしのかかわり合いの要素が含まれている。また何かを見つけて感動したりやり遂げたりしたことをみんなに伝えたいと思う場面に出会うこともある。みんなも一緒になって感激することで子どもは自分を認めてもらえた嬉しさから次の活動への意欲がでる。

高等部ではMulti Purpose Time（以下MTと記す）を設定してその中で各自が好きな時間の過ごし方ができるようになるための実践を行っている。このMTには「挑戦学習」「ほんもの学習」「レクリエーション学習」という3つの学習形態がある。どのような活動内容にするかについてなるべく生徒の希望や意見を取り入れた。ここでも自己選択・自己決定の視点と自ら学ぶ意欲を尊重する視点の結合がみられる。

以上今年度の研究の視点と経過を述べた。次に各学部の実践へ移る。

(研究推進部 新保 利久, 河合 利秋, 橋本 直紀, 山崎 晴生)

〔引用文献〕

- (1) 白石正久 (1994) 「発達を見つめる目と心」 第11回障害児問題北陸ブロック学習会
講演内容
- (2) 大野智也 「豊かな生活の条件」 『発達の遅れと教育』 (1990) No.386 P. 5
日本文化科学社
- (3) 埼玉大学附属養護学校 研究収録23 『将来の充実した社会生活をめざした
教育課程の再編成』 (1994) P. 12
- (4) 群馬大学附属養護学校 研究紀要 第15集 (1994) P. 8
- (5) 渡邊次男 「精神薄弱児(者)の福祉と動向」 全精P連会報 (1995)
- (6) 『豊かな心と生活をめざして』 金沢大学教育学部附属養護学校
平成6年度研究紀要 (1994) P. 1～8
- (7) 『教育課程』 金沢大学教育学部附属養護学校 (1988年2月) P. 4～5
- (8) 『文部統計要覧』 昭和62年度版 (1988) P. 66 文部省 第一法規出版
- (9) 三谷嘉明 (1995) 『これからの教育と福祉』 石川県教育センター 特殊教育専門講座
- (10) 『広辞苑』 第四版 新村 出編 (1991) 岩波書店 P. 2618
- (11) 北国新聞 平成7年 (1995) 5月2日付
- (12) 文部省 (1993) 「新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開」 東洋館出版
- (13) 文部省 (1993) 特殊教育諸学校 小学部・中学部 学習指導要領解説 東洋館出版